

[立ち返って、生きよ]

250824

崔楚英

エゼキエル書 18:25-32

25.あなたがたは『主の道は公正でない』と言っている。さあ聞け。イスラエルの家よ、わたしの道は公正でないのか。公正でないのはあなたがたの道ではないのか。

26.正しい人が自分の正しい行いから離れ、不正を行うなら、彼はそれゆえに死ぬ。自分が行った不正によって死ぬ。

27.しかし、悪しき者でも、自分がしている悪事から立ち返り、公正と義を行うなら、彼は自分のたましいを生かす。

28.彼は反省して、自分のすべての背きから立ち返ったのだから、必ず生き、死ぬことはない。

29.しかし、イスラエルの家は『主の道は公正でない』と言う。イスラエルの家よ、わたしの道は公正でないのか。公正でないのはあなたがたの道ではないのか。

30.それゆえ、イスラエルの家よ、わたしはあなたがたを、それぞれその生き方にしがってさばく——神である主のことば——。立ち返り、あなたがたのすべての背きから身を翻せ。不義に引き込まれることがないようにせよ。

31.あなたがたが行ったすべての背きを、あなたがたの中から放り出せ。このようにして、新しい心と新しい霊を得よ。イスラエルの家よ、なぜ、あなたがたは死のうとするのか。

32.わたしは、だれが死ぬのも喜ばない——神である主のことば——。だから立ち返って、生きよ。」

<導入>

エゼキエル書 18 章 25-32 節の御言葉を通じて、悔い改めについて考えてみたいと思います。

エゼキエルはバビロン捕囚の時代に活動した預言者です。当時のイスラエルの民は、公式な正統信仰を基盤としていました。彼らは神様がエルサレムという地に居住しており、神とイスラエルとの契約は変らないものであり、その契約は永遠であるという自負していました。

しかし、エルサレムの神殿が崩壊され、ダビデの王国が滅び、故郷から引き離されると

いう現実の中で、彼らは神様に対する多くの疑いを抱くようになりました。

エゼキエルは「神は無力ではないのか、神は私たちを見捨てたのではないのか」と言う幻滅を感じ、苦い思いを抱き、怒りに満ちたイスラエルの民たちと対面していました。

今日の箇所は『**主の道は公正でない**』と、この不満に対する神様の答え、そして悔い改めと新しい命への招きを語っています。

<1.ことわざ>

25 節をお読みいたします。

25.あなたがたは『**主の道は公正でない**』と言っている。さあ聞け。イスラエルの家よ、わたしの道は公正でないのか。公正でないのはあなたがたの道ではないのか。

ここでの「**公正でない**」とは自己中心的であり、予測不能で、さらに無原則的であることを指します。彼らはこの怒りを神様にぶつけていました。この言葉からは、神様への不信と反抗が現れています。そして、彼らは神様を非難しながらも、非難している自分たちの行為に対して恥ずかしいと感じることもできないようですね。

「公正ではない」というテーマで始まるこのイスラエルの態度から、なぜ彼らがこのように反応しているのかを理解するために 2 節をみましょう。

18:2 「あなたがたは、イスラエルの地について、『父が**酸いぶどう**を食べると、子どもの**歯が浮く**』という、このことわざを繰り返し言っているが、いったいどういうことか。

当時のイスラエルがよく使っていた、ことわざが挙げられています。ここでの「ことわざ」とは、単純な格言だけではなく、文学的な比喩までを含みます。簡単に表現しますと、人間の共通の経験から生まれた簡潔でありながら、本質を突く伝統的な言葉をさします。

このことわざは神様が統治する「**イスラエルの地**」では「父が**酸いぶどう**を食べると、子どもの**歯が浮く**」と表現されています。つまり神様は「父が罪を犯した場合、父の咎を子に報いるんだ」ということです。

これはイスラエルで普遍的に使用されることわざであり、また思想でもあったようです

ね。エレミヤ、哀歌、第二列王記にも似たようなことわざが登場するくらい、イスラエルの根深い思想だと言えます。

しかし、捕囚のイスラエルが置かれた状況を考える時、このことわざを用いて彼らは「私たちは悪いことをしていない、罪がない。それでも私たちは神の原則によって先祖の咎を負っているんだ」と表現しているようです。

おそらく、出エジプト記の言葉を誤解していたかもしれません。

出エジプト記 34:7 恵みを千代まで保ち、咎と背きと罪を赦す。しかし、罰すべき者を必ず罰して、父の咎を子に、さらに子の子に、三代、四代に報いる者である。」

しかし、この言葉は本当に咎を子に負わせるという意味ではなく、教育的・警告的な意味を持っています。つまり、大人の行動は子供に暗示的な意味を持つため、大人は行動に注意しようと予言的な警告を与えるためのものです。子どもは親の言動や態度を自然に吸収し、親を模範として成長していく可能性が高いです。そのため、神様に対して罪の習慣もそれを見て習い、受け継がれやすいので、「行動に特別に注意せよ」という意味だと考えます。

ですが、哀歌にもあるように

哀歌 5:7 私たちの先祖は罪を犯し、今はもういません。彼らの咎は私たちが負いました。

とありますね。

現在直面しているこの困難は、私たちのせいではなく、先祖が犯したの罪のせいだ、先祖たちはいなくなったのに、私たちは彼らの咎を負っている。と責任を先祖に押し付け、現実の責任からにげていたのです。またこのことわざは、責任転嫁の被害意識だけではなく、彼らが持っている「神学」への誤解でもあるとも言えるでしょう。

実は現代を生きる私たちにも似た考え方があるかもしれません。私たちも、「こうなったのは親のせいだ」、「時代のせいだ」とつぶやいてしまうことはないでしょうか？

このような風習やことわざが私たちの思想の中に無意識的に存在しているかもしれません。ことわざは納得しやすいですが、その自体は非常に世俗的で、神様のみ言葉から離れていることを主張している場合が多いのです。私たちも、このようなことわざや経験

に頼りすぎると、神様の言葉を解釈する際に混乱が生じる可能性があります。

<2. 個人の責任の原理>

神様は先祖の罪を後代に負わせません。イスラエルの民に、エゼキエルは、個人の責任の原理を説明します。

祖父、父、子の三世代の具体例を挙げます。要約しますと

1. 祖父：神様の掟に従って歩み、定めを守って真実を行いました → この人は正しい人で、必ず生きるとあります。(9 節)
2. 父：神様の掟に従って歩まず、忌み嫌うべきことを行いました → その血の責任は彼自身にあるとあります(13 節後半)
3. 子：父の悪を見て悪から離れ。神様の掟を守り行いました → 公正と義を行ったと評価され、生きます(19 節後半)

これらの例を挙げながら、エゼキエルは神様は決して先祖の罪を後代に負わせないことを明らかにします。ですから、今のイスラエルが直面しているこの捕囚としてとらえられている状況は、神様が「公正」を失ったわけではなく、自分たちが犯した罪のゆえにこのような状況になっているんだ ということです

そして今日の本文の 26-28 もその事実をまとめてもう一度強調します。

26.正しい人が自分の正しい行いから離れ、不正を行うなら、彼はそれゆえに死ぬ。自分が行った不正によって死ぬ。

27.しかし、悪しき者でも、自分がしている悪事から立ち返り、公正と義を行うなら、彼は自分のたましいを生かす。

28.彼は反省して、自分のすべての背きから立ち返ったのだから、必ず生き、死ぬことはない。

とありますね。この箇所は絶望、責任転嫁、また神学の誤解をしているイスラエルに、彼らが間違ったことを指摘するとともに、実は歩むべき希望の道も教えています。神様はイスラエルの民たちに、あなたたちはどうしようもない、運命論的な状態落ちているわけではない。彼らの妄想をまず打ち砕きました。

そして実はあなたたちは「不正の道」或いは「義の道」を選べるんだと伝えているので

す。

神様はもし今からでも正しい道を選び、歩むなら以前行ったすべての背きは覚えられない(22)とおっしゃるのです。

先祖の咎を負わせないことはもちろん、自分たちが行った悪事から立ち返るのであれば、以前行っていたすべての背きは覚えられないと語るのです。

この約束の言葉は私たちにも該当するものであると思います。

ここに集まった私たちは、神の前で正しい道を歩むことを望み、願うと思います。では、先祖の罪を問わないことを知った今、私たちはどのように生きるべきでしょうか。何が正しい道でしょうか？その基準はどのようなものでしょうか？

ただ、ここで一つのことを念頭においておく必要があります。

墮落した人間は「義」についての感覚がゆがんでいるということです。そのため、人間の経験から「これは正しい」「こうするべきだ」と思うものも実際は神様基準とずれている可能性があります。つまり、納得できるような思想であっても、実際は神様のみ言葉から離れている場合が非常に多いのです。

したがって、私たちの経験や道徳の基準から「義」や「神の前での正しい道」を完全に定義するのは難しいです。

<3.神様が変わらない基準と鈍感な人間>

では、神様が求められる「正しい道」とはどんなものでしょうか？

エゼキエル書は祖父、父、子が「義人か否か」を説明する時、変わらない基準を示しました。三代にわたっても変わらない神様の基準、同じ物差しで神様が彼らを行動を判断しているということですね。ですのこの基準は神様が世を裁く基準でもあります。

エゼキエルが挙げた基準の例を見ると(5-9)(15-17)

1. 偶像崇拜をせず、律法での忌むべきものと定めたことを行わないこと
2. 共同体の他人との関係において、特に社会的弱い立場にいる人々への影響について

—
搾取しないこと。担保として預けたものを返すこと。強奪しないこと。不幸な人の生活を積極的に支援すること。経済的に不利な立場にある人との財産問題、法的問題の扱い方

などがあります。

具体的で実践的なものを挙げています。

イエス様が語られた掟の核心は同じですね。

神を愛すること、そして隣人を自分のように愛すること(マタイの福音書 22:37-39)

神様の基準は、時代や国を超えて変わりません。

ですから、「悔い改め」を表す「身を翻せ」「背きから立ち返る」ためには、まず唯一の神様の基準から私たちが「外れている」と、認識することから始まりますね。

ただここでも一つ考えたいものがあります。

エゼキエル書はイスラエルの民たちの心を「石の心」と描写しています。それくらい、彼らは自分の罪に鈍感であり、神様の道から外れたことにも鈍感でした。それを悟らせようと神様が困難な状況に追い込みましたが、それでも、彼らは悟らない、悟れない、気づけない、「私たちは間違っていない」と主張しているわけです。

ですが、これはイスラエルだけに当てはまることではありません。聖書は堕落した人間すべてが罪に対して鈍感であると、語っています。ですから、鈍感である時点で、自分の感覚で、「あ、今神様の道から外れた」と感じることは理論上、客観的にも難しい状態にあるでしょう。

聖霊を受けたクリスチャンでさえも、神様の視点で自分の歩みが神様の道から外れていることに気づけないことがあります。例えば、堂々と先祖のせいに、環境のせいに、他人のせいにする時があります。「私は正しく生きようとした」と「悪いのは親、あの環境あの人だ」と言葉に出さなくても、心からは、心の奥深い所では堂々と思う時がありますね。もちろん、ここに立っている私を含めすべての人がそであるかもしれません。

そのため、私たちは自分の感覚に頼るより、神様が変わらない掟に自分自身を照らし合わせて生きる必要があります。今の時代はイエス様を信じることで救われるから、律法を捨ててしまった時代になっていく傾向があります。イエス様を信じることで罪が赦されていることは事実です。ですが、堕落した人間は、無意識的に堕落した感覚で歩みをし続けようとするくせがあります。

使徒パウロもローマ人への手紙で「**律法によらなければ、私は罪を知ることはなかったでしょう。**」と語っています。神様の掟に自分自身を照らし合わせた時に、やっと「聖書が語る罪」の認識ができるようになったということですね。人間の感覚では気づかない罪を、神様のみ言葉が示してくれるのです。

堕落した人間が「神様の視点の罪」の概念を正しく認識できるようになるためには、自分の歩みを神様の基準に照らし合わせなければいけません。それを用いてクリスチャンとしての歩みを確認する必要があります。

<4.生きることを望まれる神>

31-32

31.あなたがたが行ったすべての背きを、あなたがたの中から放り出せ。このようにして、新しい心と新しい霊を得よ。イスラエルの家よ、なぜ、あなたがたは死のうとするのか。
32.わたしは、だれが死ぬのも喜ばない——神である主のことば——。だから立ち返って、生きよ。」

神様の掟はお私たちがどこに戻ればよいかを教えるものです。そして、この掟を下さる理由は私たちを裁いて、死なせるためではありません。私たちを生かせるためです。

背きを、あなたがたの中から放り出せと！「わたしは、だれが死ぬのも喜ばない」
と民たちに強く、繰り返し呼びかけています。神様の熱情が感じられるでしょうか？

主の「生きよ」という提案は極めて愛に満ちたものです。また神様の掟に基づいたものであります。そこに立ち返ればそこには恵みがあり、そこで豊かな命を得ることができるでしょう。

さて、イスラエルの民は悔い改めたでしょうか？立ち返ったでしょうか？残念ながら彼らの耳にはエゼキエルの言葉はただの「例え話」にすぎなかったようです。結局彼らは滅びつくされ本当にわずかな人達が残され、集められた時、やっと「神が主であることを知る」と記録しています。

神様がイスラエルに対しての「立ち返って、生きよ」と叫んでいるのは、私たちへの呼びかけでもあります。私たちはイスラエルのように鈍感な石の心を持っているのでしょうか？

あるいは神様の掟に敏感に反応できる肉の心持っているのでしょうか？

私たちは選択することができます。義の道を選び、生きるか、イスラエルのように滅びるか。先祖であるイスラエルの歩みをみて、それを反面教材とし、立ち返り、神様の義の道を歩むことを願っているのでしょうか？ 心だけではなく、行動をもって立ち返った者には豊かな神様の命の泉がまっているでしょう。

<まとめ>

私たちは誰もが、日々の歩みの中で選択を迫られています。神様は先祖の罪を背負わせることはありません。運命論等なもの左右されることはないと言っています。

ですから、今、私たちの選び方次第で、新しい命への道は開かれています。

私たちは霊と心において新しくされ続け、真理に基づく義と聖をもって、神にかたどり造られた新しい人を着ましょう。(エペソ人への手紙 4:23) 神様の掟をしり、そこから外れたすべての不義から「立ち返って、生きよ」と呼び掛けておられる声に応えて、今日新しい一歩を踏み出しましょう。

祈ります。